

Creating the Database of “A Collection of Osamu Yamaguti (Yamaguchi)’ s Photographs of Asia-Pacific Musicology” as a Practice of Applicative /Applied Musicology : A Brief History of Ethnomusicology and Photographs of Okinawa and Amami Musical Instruments of the 1970s<Special Theme : Future of Academic Activities Opened with Digital Image Databases>

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009828

応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学 写真コレクションのデータベース化に向けて

—民族音楽学の成立概略史と

1970年代沖縄・奄美の楽器の写真を手がかりに—

小西潤子*

Creating the Database of “A Collection of Osamu Yamaguti (Yamaguchi)’s Photographs of Asia-Pacific Musicology” as a Practice of Applicative/Applied Musicology: A Brief History of Ethnomusicology and Photographs of Okinawa and Amami Musical Instruments of the 1970s

Junko Konishi

「山口修写真コレクション」は、山口修（1939-）が1960年代半ばから1990年代にアジア・太平洋各地で収集した5,000点以上の写真資料からなる。これらの理解を深めるために、民族音楽学の歴史を遡ることで山口の学問的関心を突き詰める。すなわち、20世紀前後の欧州における近代科学に基づいた比較音楽学、戦前日本における東洋音楽の歴史と理論を扱った東洋音楽研究、1950年代から米国で文化相対主義の影響によって開花した行動学的民族音楽学である。これらを基盤に、山口は民族音楽学の理論と実践を国内外に発信し、「応用音楽学」として集大成した。その中で楽器学の骨子は、(1)エティック／イーミックスなアプローチ、(2)楽器づくりのわざ、(3)楽器の素材、とされる。次に、これらの観点から1970年代沖縄・奄美における楽器の写真について、当該文化の担い手による解釈を交えて論じる。対話の積み重ねによる持続的なデータベースづくりは、まさに山口が目指した未来志向性の応用音楽学的実践だといえる。

“A Collection of Osamu Yamaguti’s Photographs” comprises more than

*沖縄県立芸術大学

Key Words : applicative/applied musicology, ethnomusicology, Osamu Yamaguti (Yamaguchi), musical instruments, Okinawa and Amami islands

キーワード : 応用音楽学, 民族音楽学, 山口修, 楽器, 沖縄・奄美

5,000 photographs taken by Osamu Yamaguti (Yamaguchi) (1939–) during the mid-1960s to the 1990s at various Asian and Pacific locations. For a deeper understanding of the photographs, a history of ethnomusicology connected to Yamaguti’s research interests is explored. Yamaguti studied comparative musicology, which was developed throughout the early 20th century in Europe, the historical research and theory of Asiatic music in Japan and ethnomusicology specifically examined human behavior that has evolved in the United States along with increasing cultural relativism since the 1950s. Based on them, Yamaguti diffused the theory and practice in ethnomusicology domestically and overseas, and then compiled “applicative/applied musicology”. The fundamentally important approaches and subjects of organology in the applied musicology are (1) “etics” or “emics”, (2) skills of making musical instruments, and (3) materials of the musical instruments. From these perspectives, photographs of the musical instruments of Okinawa and Amami taken in the 1970s are interpreted by dialogues between an observer and a craftsperson working with the musical instrument. The sustainable activities of creating the database with layered dialogues between “etics” and “emics” approaches to the cultural objects are the destination of Yamaguti’s applied musicology.

1 はじめに	4.2 日本での民族音楽学に関する出版物の始まり
2 欧州の比較音楽学と東洋音楽学への挑戦	4.3 日本からの国際的発信
2.1 西洋中心主義批判からの応用音楽学の提唱	5 応用音楽学と山口修写真コレクションの楽器
2.2 近代科学的楽器分類への民族科学的方法の導入	5.1 応用音楽学
2.3 戦前日本における学術的基礎の構築	5.2 山口修の楽器学と写真コレクションの意義
3 民族音楽学の成立とその学び	5.2.1 楽器へのエティック／イーミックスなアプローチ
3.1 欧州における民俗音楽の比較研究	5.2.2 楽器づくりのわざ
3.2 米国における民族音楽学の研究領域確立	5.2.3 楽器の素材
3.3 日本における民族音楽学の成立	5.3 知的プラットフォームとしてのDiPLASのデータベース
4 応用音楽学的実践の始まり	6 結び
4.1 「アジア伝統芸能の交流」プロジェクト(ATPA)とドキュメンテーション	

1 はじめに

DiPLAS 支援事業（本特集 序論を参照）において整理対象となった写真コレクションのひとつ「山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクション」（以下、「山口修写真コレクション」と表記）は、音楽学者・山口修（1939-）の1960年代半ばから1990年代初めまでの学問的足跡を示す写真資料である。山口は、東京大学卒業後ハワイ大学大学院修士課程に進み、そこで指導にあたった現・同名誉教授 B. Smith（1920-）の勧めにより、戦前日本統治下にあった旧南洋群島・パラオをフィールドに決めた。そして、1965-1966年パラオに滞在し、その音楽と舞踊の全貌を初めて分類学的に明らかにした修士論文を提出した（Yamaguchi 1967）。同課程修了後は、米国ウェスリヤン大学大学院博士課程世界音楽プログラムに進み D. McAllester（1916-2006）に師事した。

1969年武蔵野音楽大学に赴任して以降は、大学で学生の指導にあたりながら、様々なプロジェクトに参画した。とりわけ、1974年小泉文夫（1927-1983）の呼びかけで、徳丸吉彦（1936-）と共に共同企画監修者となった「アジア伝統芸能の交流」プロジェクト（ATPA）は、その後の研究活動にも大きな影響を与えた。1976年からは大阪大学に赴任したが、1979-1981年に家族と共にドイツに滞在したことが、後に異文化理解の理論化に役立った。また、1986年徳丸吉彦と共編著の「第3回国際伝統音楽会議コロキウム報告書」（Tokumar and Yamaguti 1986）以来、欧文での出版物等ではヘボン式の Yamaguchi から訓令式の Yamaguti に姓の表記を変更している¹⁾。1991年3月、山口は大阪大学より博士の学位を得た。その学位請求論文（山口 1990）は中国語に翻訳され、1999年北京で出版された（山口 1999）。これらの研究活動を基盤に、2000年「社会から学び、社会へ成果を還元する」ことを目標に掲げた「未来志向性」の「応用音楽学」という新たな学問的方法を構想したのである（山口 2000: 10）。

「山口修写真コレクション」は、同時期における民族音楽学の動向をふまえて山口独自の視点でとらえた写真からなる。山口は、20世紀前後の欧州における近代科学の思想と技術を基盤とした比較音楽学、戦前日本における東洋音楽の歴史と理論を扱った「東洋音楽研究」を学んだ。さらにハワイおよび米国本土の大学に留学したことで、戦後米国で文化相対主義の高まりと共に開花した行動学的民

族音楽学の研究方法を直接学んだ。帰国後は、民族音楽学の教育研究に加えて、社会的活動にも積極的に参画した。そして、これらの経験を集大成して、「応用音楽学」を構想し、社会から音楽学へのかかわりを引き出すことも視野に入れた両者の互恵的關係を築くことを提唱した。

「山口修写真コレクション」のうち、2019 年度にデジタル化が完了している写真は 5,032 点に及ぶ。本稿では、山口に影響を与えた民族音楽学の歴史を遡ることで、これらの背景について理解をする。次に、1970 年代沖縄・奄美における 569 点の写真から楽器の写真数点をとりあげ、それぞれの写真と照らし合わせながら、山口の楽器学の骨子をなす (1) エティック／イーミックスなアプローチ、(2) 楽器づくりのわざ、(3) 楽器の素材について論じる。また、当該文化の担い手による楽器の見方を紹介し、文化の担い手ら関係者と対話を積み重ねることでデータベースを更新し続けることの必要性について述べると共に、この営みは、まさに山口が目指した未来志向性の応用音楽学的実践であることで論を閉じる。なお、本稿で楽器の写真に注目したのは、DiPLAS 支援事業の対象が、沖縄の三線製作課題解決を目論む研究 (JSPS 科研費 JP70332690) であったことによる。

2 欧州の比較音楽学と東洋音楽学への挑戦

山口らの世代の研究者は、20 世紀前後の欧州における近代科学の思想と技術を基盤とした比較音楽学と、戦前日本における東洋音楽研究の一部であった諸民族の音楽²⁾をめぐる学問のあり方と方法を学ぶことから研究を始めた。とりわけ、後者の東洋音楽研究パイオニア世代は彼らにとって年齢差はあっても同時代を生きた存在であり、その後姿を見て学んだのである。

2.1 西洋中心主義批判からの応用音楽学の提唱

近代科学にのっとった音楽研究の成立とその後の議論に大きな影響を与えたのが、1885 年ウィーン大学講師の G. Adler (1855–1941) が発表した論文である。そこで G. Adler は、「音楽学 Musikwissenschaft」という学問名称のもとに、歴史的音楽学と体系的音楽学の 2 つの領域を区分した。さらに、後者の下位部門の 1 つに「民族誌や民間伝承の調査と比較研究からなる」ムジコロジー Musikologie を配し

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて
た (Adler 1855: 15)。ムジコロジーは、「比較音楽学」と呼ばれて、ウィーン大学
では戦前まで講義された (徳丸 1991: 12-13)。G. Adler 自身は西洋音楽を対象とし
た歴史的音楽学研究に従事し、音楽学のパイオニアとして称された (Duckles and
Pasler 2001: 490-491)。

この2分法に対して、山口は「西洋音楽の歴史を対象とするのが歴史的音楽学
であって、非西洋世界の諸民族については…そこには含めずに民族音楽学と称し
ている」という「ある種の差別的な区分意識が支配している」と批判している (山
口 2000: 15)。そして、音楽の過去を歴史学的に扱う「音楽史学」、音楽の現在を
比較学的に扱う「比較音楽学」、そして音楽の未来を扱う「応用音楽学」という、
対象地域を区別する意図をもたない「音楽学3分類」を提唱するに至った。山口
は、従来の音楽学では「未来志向性」が大きく欠如していたと主張する³⁾。そし
て、応用音楽学は研究成果を社会に還元するにとどまらず、音楽学者と社会の互
恵的關係によって成り立つことを強調している。さらには、「社会から音楽学や学
問一般へのかかわりあいをもっとあってしかるべき」だとも述べている (山口
2000: 10-14)。

2.2 近代科学的楽器分類への民族科学的方法の導入

1877年ブリュッセル王立音楽院に楽器博物館が設立され、V. C. Mahillon (1841-
1924) が所蔵楽器の整理にあたった (Libin and Myers 2001; Waterhouse 2001)。V. C.
Mahillon は、「古代インドの楽器分類法」を参考に自鳴楽器 Autophone、膜鳴楽器
Membranophone、気鳴楽器 Aerophone、絃鳴楽器 Chordophone という普遍的かつ客
観的な基準から4分類する世界の楽器分類法を考案した (V. C. Mahillon 1880; 太
田 1943: 139-156)。さらに、H. M. von Hornbostel と C. Sachs (1881-1959) は、V. C.
Mahillon が命名した自鳴楽器を体鳴楽器 Ideophone に改称すると共に約300項目
からなる細かい分類基準を示し、アメリカの図書館学者 M. Dewey (1851-1931)
創案による「デューイ十進分類法」を参考に、客観的、論理的、普遍的な観点か
ら系統立てた (Hornbostel and Sachs 1961)。この近代科学的な楽器分類法は、植民
地等から収集したエキゾチックな楽器を博物館で展示し、本国の人々に鑑賞して
もらうための実用性から生まれたといえる。MHS 楽器分類法に対して、山口は
「いまでも楽器学関係の必読文献の筆頭に挙げられるほどにその存在価値を失って

表 1 さまざまな楽器分類の異同関係 (山口 2004: 73 図 6-1 をもとに筆者再構成)

日本	中国	アラビア	ヨーロッパ	インド	MHS 方式
うちもの 打物	木	固体振動	打楽器 Percussion	打	体鳴楽器 idiophones
	金			(皮) 打	膜鳴楽器 membranophones
	石				
革					
ひきもの 弾物	糸	空気振動	弦楽器 string instruments	弦	弦鳴楽器 chordophones
ふきもの 吹物	匏		鍵盤楽器 keyboard instruments		
	竹		管楽器 wind instruments	管・気	気鳴楽器 aerophones
	土				
(なし)	(なし)	(なし)	電子楽器 electronic instruments	(なし)	電鳴楽器 electrophones

はいない」としつつも、「結局は矛盾に直面し、文化相対主義的な研究へと傾向が移行していった」と批判的な見方をしている (山口 2004: 75)。すなわち、山口は文化相対主義を徹底する学問的立場として、20 世紀半ばに提唱されたエスノサイエンス ethno sciences (民族科学) の考え方を紹介し、これに則った楽器分類の比較を例示している (表 1)。そして、ソロモン諸島マライタ島において、竹を使った楽器の奏法により音楽や楽器が分類されることを明らかにした、フーゴー・ゼンプらの業績 (de Coppet/Zemp 1978; Zemp 1971, 1972, 1978, 1979) を評価する一方で、ゼンプらが現地への成果還元を怠った点を批判している (山口 2004: 73-75)。

2.3 戦前日本における学術的基礎の構築

1885 年、イギリスの数学者・言語学者 A. J. Ellis (1814-1890) は、音律を物理的に測定した (Ellis 1885; エリス 1951)。これに刺激を受けたドイツの哲学・心理学者 C. Stumpf (1848-1936) は、1877 年に発明された蓄音機で音楽を録音し、採譜する研究方法を提示した。そして、1902 年ベルリン大学にフォノグラム・アルヒーフ Phonogram-archiv を設置して、それらを保存した。研究協力者には、O. Abraham (1872-1926), H. M. von Hornbostel (1877-1935), 後継者には、W. Wertheimer (1880-1943), R. Lachmann (1892-1939), C. Sachs (1881-1959) らが含まれた (岸辺編 1953: 59)⁴⁾。

日本では、1936年東洋音楽学会（現・一般社団法人東洋音楽学会）が発足した。マイヨンの楽器分類法等を含む欧米の研究動向も紹介されたが（太田 1938a; 1938b）、研究の多くは楽律や東洋史の流れを汲むものだった⁵⁾。にもかかわらず、欧州では東洋音楽の歴史が扱われずに「民族音楽」と一括りにされることを岸辺成雄（1912–2005）や林謙三（1899–1976）らは批判していた（遠藤 2017: 226）。

1921–1934年、朝鮮、台湾、厦門、沖縄、中華民国、樺太、南洋群島で調査を行い、録音および調査資料を残したのが、「東洋音楽実地調査の開拓者」（岸辺 1970: 15–25）と評される田辺（田邊）尚雄（1883–1984）であった⁶⁾。個人で録音機材を入手できなかった時代、東京帝国大学で理論物理学を修めた田辺は、家庭用のラッパ附手回し蓄音器に自ら工夫した吹込み装置を取り付け、蠟盤に録音するよう作り替えた（田辺 1978: 1）。田辺に続き、滝遼一（1935年以降：中国）、岸辺成雄（1941, 1943年：朝鮮、中国、満州）、梶源次郎（1938年：インド）⁷⁾、黒沢隆朝⁸⁾（1939年：タイ、カンボジア、ジャワ、バリ）が戦前に実地調査を行った（岸辺 1970: 21–22）。これらすべてがアジア各地で行われたものだったが、1960年代の東洋音楽学会会員による音楽留学や海外調査旅行も、山口のハワイ（渡航年：1964–1967、うち1965–1966はパラオ [ベラウ]⁹⁾）を除くと、多くの日本の民族音楽学研究者はアジア各地に向かっていた¹⁰⁾。

それゆえ、1934年南洋群島での田辺による計21分30秒ほどの録音資料や、調査記録として出版されている写真や歌詞の一部（東洋音楽学会編 1968: 19–171）は、貴重な資料である。ただし、「官憲の積極的な援助」による調査（東洋音楽学会編 1968: 4）であったことによるメリットと、その限界もあったと思われる。また、1935–1936年にはハワイのビショップ博物館によるミクロネシア調査に際して、人類学者・村主岩吉（1889–1966）がワックスシリンダー39本にパラオ180曲、ヤップ51曲、ポナペ34曲の歌を録音した。その後50年経ってから、パラオ約32分、ヤップ約6分、ポナペ約5分の歌をカセット録音として付帯した小冊子が出版された（Tatar 1985: 12）。山口がパラオで8カ月にわたるフィールドワークを行ったのは、その約30年後のことである。そのさらに20年後、山口は「まだごく一部しか研究に活用されなかったし、当然公表も一部にとどまっている」ことへの責任から、192ページにわたる日英2言語からなる歌詞集成を作成している（山口 1985）。

3 民族音楽学の成立とその学び

欧州で始まった比較音楽学は、ナチスドイツの迫害から逃れた研究者によって米国にもたらされ、行動学を重視した民族音楽学が成立した。山口は、文化相対主義と共に開花した米国、とりわけハワイ大学大学院修士課程で学び、アメリカ信託統治領下におかれていたパラオでフィールドワークを行った。そして、帰国後はマスコミなどでも諸民族の音楽普及活動に従事していた小泉との共同プロジェクトに従事した。

3.1 欧州における民俗音楽の比較研究

1947年ロンドンで、(1)あらゆる国の民俗音楽の保存、普及、実践、(2)民俗音楽のさらなる比較研究、(3)民俗音楽への関心を通じての理解と友好関係の促進を目的に、国際民俗音楽会議 International Folk Music Council (IFMC) が28か国参加により設立された。IFMCは、60か国の900人の会員が集まった国際組織に発展し、歴代会長にはイギリスの作曲家 R. V. Williams, J. Kunst (1891–1960)、ハンガリーの作曲家 Z. Kodály (1882–1967)、後述の W. Rhodes (1901–1992) が務めた (Karpeles 1965)。IFMCは1981年国際伝統音楽学会 The International Council for Traditional Music (ICTM) に改称された¹¹⁾。

1950年オランダの J. Kunst は、比較音楽学に代わる民族音楽学 (Ethno-musicology) という名称を提唱した (Kunst 1950)。そしてその後、民族音楽学の対象として「部族音楽 tribal music, 民俗音楽 folk music, 非西洋のあらゆる芸術音楽」をあげ、その調査によって音楽の社会的側面と文化触変を研究すると述べた。ただし、西洋の芸術音楽やポピュラー音楽を対象から除いている (Kunst 1959: 1)。以来、欧米では比較を中心とすえない場合には、比較音楽学という呼称は使用されなくなった。

3.2 米国における民族音楽学の研究領域確立

米国では、民族音楽学という新しい研究領域の確立に向けて、若手研究者が動き出した。1953年 W. Rhodes, D. McAllester, A. P. Merriam (1923–1980) が、音楽を文化との関係からとらえ、人間の行動分析から生じる問題を理論的に議論す

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて同志を募ることとした。そして、C. L. Seeger (1886–1979)¹²⁾ を招いてニューズレターを作成し郵送した。その結果、1955年会員数472名の民族音楽学会 Society for Ethnomusicology (SEM) が創設された (Rhodes 1956: 459–460)。SEMでは、学問的体系化と方法論の確立について比較音楽学から学び、F. T. Densmore らのモノグラフや研究素材を重視することとなった (Herzog 1935; McAllester 1954; Merriam 1955; Nettl 1955; Rhodes 1952)。

一方、1949年ハワイ大学マノア校音楽学部にてピアノ教諭として赴任したB. B. Smithは、学生の民族性を尊重した音楽の入門的授業の必要性を感じた。自らも1955年に箏を習い始め、1956年には日本で宮城道雄のレッスンを受けた。1960年代には、東アジアの音楽と美学の比較による理解のために、雅楽や沖縄の伝統音楽、韓国の伽耶琴、中国の古琴、韓国や日本の太鼓、ハワイの盆踊りを実践的に学んだ。B. B. Smithの貢献によって、1960年マノア校に民族音楽学の修士課程が設立された (The Society for Ethnomusicology 2016)。また、在学生による「ミクロネシアの魅力的な夕べ An Enchanted Evening in Micronesia」を開催し、1963年にはミクロネシアでサーベイ調査を行った。山口がハワイ大学大学院修士課程に入学し、B. B. Smithの指導の下でバラオをフィールドに定めたのは、その翌年1964年のことだった (写真1)。



写真1 山口修 (1965年頃 於: ヤップ離島)
DiPLAS ファイル名 02_13_19

山口は、ハワイ大学修士課程修了後、1967-1968 年米国ウェスリヤン大学大学院博士課程世界音楽研究プログラム（以下、WesWMP）に進学した。ここで師事したのが、SEM 創始者の 1 人 D. McAllester であった。WesWMP を設置した R. E. Brown (1927-2005) は、1961 年マドラス留学中の小泉文夫 (1927-1983) と出会って親交を深め、1967 年、1971 年と小泉を WesWMP の 1 セメスター教授として招聘した。そのとき、山口は小泉に接触している (山口 2002)。また、WesWMP には山口より一足先に、柘植元一 (1937-) が留学していた。柘植は、東京藝術大学専攻科修了後、1963-1965 年テヘラン大学でペルシア音楽を研究し、1966 年から WesWMP で研究、博士号取得後に同大学助教授を経て、1979 年帰国した。

山口が留学していた 1960 年代半ばの米国では、平等を求めるアフリカ系米国人の闘争がピークに達していた。1964 年公民権法案が可決され、女性は法的手段を獲得し 1970 年代まで男女平等運動が活発化した。1968 年にはアメリカン・インディアン運動 (AIM) が組織され、1970 年代からはラテンアメリカ系米国人の政治参加が加速していった (アメリカンセンター・ジャパン n.d.)。山口は、1960 年代の米国で「本来数えられない名詞」であったミュージックに “a music” “musics” という表現が使われ始めたことを後になって想起し、「文化相対主義華やかなりし風潮の反映」だったと回想している (山口 2004: 220)。

3.3 日本における民族音楽学の成立

米国留学から帰国した山口に最も大きな影響を与えた一人が、小泉であった。日本で「民族音楽」という語が初出するのは、『世界民族音楽』(堀内 1933) だとされるが (小日向 2014: 18-19)、この語を一般に広めたのは小泉だといっても過言ではない。小泉は、東洋音楽研究者の下で日本音楽の綿密な構造分析から音階論を引き出した比較音楽学者であり、音楽それ自体の中に民族性や文化的意味を見つけた点で、民族音楽学者であった (山田 2002)。

小泉はもともと西洋音楽に親しんでいたが、東京大学での吉川英史 [英士] (1909-2006) の講義をきっかけに、日本音楽に関心をもった。日本国内で民謡調査と民俗資料収集を 1940 年から行っていた町田佳聲 (1888-1981) を手伝って、『日本民謡大観』のための採譜を行った。『音楽事典』(平凡社 1956) の編集にも関わり、またクラシック音楽ファンの愛好誌『フィルハーモニー』に連載した論

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて
考をベースとして、1956年修士論文として日本の伝統音楽の「テトラコルド理論」
を組み立ててた（岡田 1995: 78-94）。

1957年インド政府給費留学生としてマドラスで南インド古典音楽の実技を学んだ後、小泉は各地で行ったフィールドワークをもとに¹³⁾ 放送メディアで多くの人々に民族音楽の魅力を語りかけ、1959年から1983年まで東京藝術大学で教鞭をとり、1970年代半ばから1980年代半ばを中心に多数の図書や音源資料を残した¹⁴⁾。

4 応用音楽学的実践の始まり

1974年、小泉の呼びかけで、山口は「アジア伝統芸能の交流」プロジェクト（ATPA）の共同企画監修者となった。事前調査、実行（上演）、記録の作成という3年1周期のプロジェクトは、山口の研究活動や「応用音楽学」の構想にも大きな影響を与えた。

4.1 「アジア伝統芸能の交流」プロジェクト（ATPA）とドキュメンテーション

小泉は、1970年日本万国博覧会協会委嘱を受けて「アフリカのまつり」「アジアのまつり」の製作・演出を行い、その後もNHK-FM「世界の民俗音楽（後の「世界の民族音楽」）」の企画・放送等に携わった。そして山口と徳丸吉彦（1936-）に呼びかけ、1974年より国際交流基金の助成による「アジア伝統芸能の交流」プロジェクト（ATPA）¹⁵⁾ 共同企画監修を行った。そして、企画の方針や招聘する国、演者についての話し合いを行い、3年1周期の事業を遂行した（岡田 1955: 278-280）¹⁶⁾。

山口は、ATPAにおいて「優れて応用音楽学的な活動に従事出来た」と振り返っている（山口 2000: 88）。当時、対象地域の音楽は西洋の研究者には知られていたが、当該地域の人々が他のアジアの音楽を聴くことも研究することもほとんどなかった。そこで、ATPAは「マレーシアの人がフィリピンの音楽演奏を観察する、モンゴルの人がインドの音楽演奏を見るという具合に、アジア人同士で観察」という“Asian observing and being observed by Asians”を基本方針にあげた（徳丸 2018: 6-7）。単なる招聘公演に留まらない相互交流の場を設けたことが、振り返る



写真2 カリंगाのゴング・アンサンブル (1975年頃 於: フィリピン)
DiPLAS ファイル名 02_13_19

と応用音楽学的だったといえる。

1976年第1回 ATPA の上演プログラムは、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピンからの小規模の器楽アンサンブル中心であった。フィリピンからの招聘団体としては、ルソン島北部のカリंगाが候補にあがった。山口は現地を訪れ、カリंगाの楽器演奏の様子を写真に収めている(写真2)。当初、フィリピン政府は「カリंगाはフィリピンを代表しない」という理由で、反対した。というのも、当時のマルコス政権はカリंगाの居住地を埋めてダムを建設する計画をしており、招聘されたカリंगाの音楽家たちが日本で反マルコス運動をすることを恐れていたからである。これに対して、ATPAは「カリंगाはフィリピンの一部であり、カリंगाの音楽を知るとは、世界の音楽、人間の音楽を知るために必要」であると主張し、最終的にはカリंगाの招聘に成功した(徳丸2018: 7)。

基本方針に従って、ATPAは出演者同士そして出演者と研究者が「対等の立場で互いに逆の報告から見つめ合うこと」を理念¹⁷⁾とし、一般公演のみならず相互交流のためのセミナーが行われ、スタジオ録音・録画による高品質の録音をもとに16ミリ映画、レコード集が作成された。また、録音・録画の綿密な分析により、英文375頁の報告書(Koizumi, Tokumaru, and Yamaguchi eds. 1977)が作成された。

山口は、東南アジアおよび日本の異なる伝統音楽を担う音楽家が意見交換するためのガイドラインを事前に作成した。すなわち、「諸民族の音楽における調査の

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて
項目」として、1. 社会文化的脈絡一般、2. 音楽文化一般、3. 音楽システム一般、4. その他一般、5. 音楽家、6. 上演、7. 演目の歌詞、8. 演目の音楽、9. 演目における舞踊その他、10. その他の10項目を概要としてあげ、その下位分類、さらに必要に応じてその下位分類を設けた (Yamaguchi 1977)。これは、「資料収集の段階から目的や方法を明確に設定したドキュメンテーションの必要がある。また、情報の整理と記録は、どのような手段と方法をとる場合でも可能な限り綿密になされないと史料価値を減じることになる」(山口 1983: 2475) という主張につながるものであった。

また、フィールドワークで収集した資料の整理と保存について、早くから関心を寄せていた山口は、「資(史)料を研究者だけでなく広く社会一般に役立てうるものとする、とりわけ文化の担い手に還元すること」を目的としたアーカイヴスの重要性を提唱した(山口 1983: 2476)。ATPA 報告書等の成果は、現地にも「フィールドバック fieldback」することが目論まれた。フィールドバックとは、「フィードバック」を進化させた考え方として、徳丸が提案した語である(Tokumaru 1977: 11)。そして、フィールドバックを「サイバネティックスのフィードバック(feedback)とよく間違われる」が「研究成果のフィールドへの還元である」と述べている(徳丸 2018: 11)。

これらの著述では、フィールドバックとフィードバックの違いは明らかにされていない。徳丸が触れているサイバネティックスとは、アメリカの数学者 N. Wiener (1894–1964) が 1948 年、通信工学、制御工学、神経生理学、心理学、社会学を同じ組上に載せ、動物と機械における通信と制御の問題について考察した著書『サイバネティックス』で提案した学際領域である(杉本 2008: 17)。それまで技術者は、増幅回路のように、機械の出力エネルギーを入力エネルギーに還元することを指してフィードバックと呼んでいた。これに対して、N. Wiener (1894–1964) は、医学者 A. Rosenbleuth (1900–1970)、コンピューター・エンジニア J. Bigelow (1913–2003) との学際研究「行動、目的、目的論」において、フィードバックを出力エネルギーと入力エネルギーの誤差によって制御される能動的行動と定義している(Rosenbleuth, Wiener, and Bigelow 1943: 19)。

このように、フィードバックを出力エネルギーと入力エネルギーを巡るの目的論的な自己調節過程と理解するならば、調査研究者、フィールドワークの資料、

文化の担い手はこのシステムのどこに位置づけたらよいのか。徳丸は、「外国の研究者が日本に調査に来て、その成果を日本の音楽家たちにまったく戻さないことを見ていた」（徳丸 2018: 11）。フィールドバックを還元するという意味だけで用いることに、徳丸や山口は違和感を覚えたのだと考えられる。

徳丸は、フィールドバックの一例として、対象地域の言語で調査結果を出版することをあげている。その際、調査結果よりも音楽づくりの過程 *music-making process* を強調することで、調査された側にも重要な情報となる。現地語での報告書出版はかなわなかったが、写真や図がふんだんに使われ、計測結果や採譜が掲載されることで、音楽づくりの過程が示された。また、書籍としてのみならず、第 2 次口頭性の手段である LP レコードと 16 ミリ・フィルムを作り、それを現地に戻したのである（徳丸 2018: 11）。

4.2 日本での民族音楽学に関する出版物の始まり

日本では、1980 年前後ようやく民族音楽学の書籍類が出版されるようになり¹⁸⁾、さらに 1990 年代前半までに、事典類の出版が続いた。山口は『音楽大事典』（平凡社 1983）、『ニューグローヴ世界音楽大事典』（講談社 1993–1995）等、日本語で読める本格的音楽事典類の執筆編集に関わった。とりわけ、前者の「民族音楽学」の項目内容は、初心者にとって難解な専門用語も含まれるものの、40 年近くたった現在でも有用性が高い秀逸な記述である（山口 1983）。また、山口は『岩波講座日本の音楽・アジアの音楽』（蒲生他編 1988）、『民族音楽概論』（藤井他編 1992）の編集を行った¹⁹⁾。さらに、『音と映像による世界民族音楽大系』（藤井監修 1988）²⁰⁾、『新・音と映像による世界民族音楽大系』（藤井監修 1994）²¹⁾ など、国立民族学博物館を拠点とした藤井知昭（1932–）を監修者とする諸民族の音楽に関わる音響映像資料のセット販売が行われた²²⁾ これらの別冊解説書（各 2 冊）では、山口を含む各地域に詳しい専門の研究者らが執筆している。このように 1980–1990 年代の日本では、充実した民族音楽学の基礎資料が蓄積された。それを率先した山口は、さらに実践的な研究活動へと向かった。

4.3 日本からの国際的発信

1980 年代半ばから 1990 年代にかけて、日本で音楽学系の国際学会がいくつか

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて開催された。1985年にはICTMコロキウム「音楽において口で伝えられるものと記されるもの」が東京で開催され、徳丸、山口、柘植、大谷が日本側委員会を結成し、L. Treitler (1931-)、R. Finnegan (1933-)、S. Feld (1949-)ら多様なゲストが招聘された。そして、翌年には徳丸と山口の編集で英文の報告書が作成された(徳丸 2002: 32)。ただし、その編集方針には「編集者は日本人で、日本での出版である」こと、「非英語圏の音楽とその関連する文化的側面を扱う」にもかかわらず、英語で出版することとなったと記されている (Tokumaru and Yamaguti eds. 1986)。また既述のように、山口が姓のローマ字表記を訓令式に変更したのはこれ以来であった。

1990年大阪で開催された国際音楽学会のシンポジウム (SIMS) では、大阪大学がホストとなって運営チームを結成し、山口らを中心に海外からの参加者にきめ細やかなサポートを行った。また、報告書作成にあたっては、徳丸が別のチームを結成した(徳丸 2002: 35; Tokumaru et al. eds. 1991)。その後、山口と徳丸は、1994年ユネスコ会議参加をきっかけに「ベトナム雅楽復興計画」に着手し、現地の芸術大学に宮廷音楽コースを開設する事業に携わった (Tokumaru and Yamaguti eds. 2002)。また、「ベトナム少数民族無形文化遺産調査・映像記録化および人材養成プロジェクト」も実施し、DVD付報告書を出版した(月溪・山口編 2006)。

5 応用音楽学と山口修写真コレクションの楽器

欧米では、民族音楽学による公益事業への貢献に対する関心がますます高まっている。こうした実践や考え方は応用民族音楽学²³⁾と呼ばれ、SEMにもICTMにも応用民族音楽学研究グループが創設されている。この先駆けとして、Ethnomusicology 誌の特集「音楽と公益」(Titon 1992)を組んだJ. T. Titon (1943-)は、応用民族音楽学を「民族音楽学的学問、知識、理解を実践的に使うこと」だと幅広くとらえている (Titon 2015: 4)。米国における応用民族音楽学的活動は、F. T. Densmore らによる米国民学局 Bureau of American Ethnography のためのアメリカ先住民(インディアン)の歌の収録 (Densmore 1918)、A. Lomax (1915-2002) による米国国会図書館のためのフォークソングのアーカイヴに遡る歴史があり、それを担ってきたのは大学以外の機関に所属する専門職であった。冷戦時代、政府

主導の国立芸術基金やスミソニアン協会において、B. L. Hawes (1921–2009) や D. Sheehy が公益プログラムを実施したのもこれにあたる (Edwards 2019)²⁴⁾。

スミソニアンフォークウェイズ前所長 D. Sheehy は、応用民族音楽学を「世界中の人々の音楽研究へのアプローチのためのアプローチ」だと述べ、その目的、戦略、技術、評価の4つの領域に言及している。その戦略としては、1. 表演の新たな「枠組み」をつくること、2. コミュニティに音楽モデルを還元すること、3. コミュニティが戦略的モデルと保存の技術にアクセスできるようにすること、4. より幅広い問題への幅広く組織的な解決法を見出すことをあげている (Sheehy 1992: 329–331)。欧米における応用民族音楽学の概念や実践は多様な展開を遂げているが (Pettan and Titon 2015)、方法論確立に向けて模索が続いている。

それに対して、山口は、民族音楽学に関する膨大な研究活動を邁進し続けた結果、「応用音楽学」の構想にたどり着いた。それは、近代欧州における音楽学の理念への原点帰帰を経て、自らの研究活動を総括して導き出した学問的方法であった。これは、欧米における「応用民族音楽学」にも通じるものであり、日本では唯一山口が「応用音楽学」を提唱している。

5.1 応用音楽学

これまで述べたように、山口による「音楽の未来を扱う応用音楽学」構想の原点は G. Adler による歴史的音楽学と体系的音楽学の2分法にあった。これは、戦前、東洋音楽の歴史をかえりみなかった欧州の「悪しき」伝統が、米国の大学に引き継がれたものだった。その根底にある西洋中心主義に対して、山口は自らが提唱する「応用音楽学」のキーワードとして、L. Blacking による “How Musical Is Man?” (徳丸は「人間の音楽性」と翻訳、ブラッキング 1978) という問いかけを置き換えた、「ホモ・ムジカントゥス (音楽的なヒト)」という語をあげる。また、その対象範囲として、C. Small が提唱した「ミュージッキング」(Small 1998) の考え方をあげ、音楽する行為すべてを含めるものとする。さらに、「すべての人は、ホモ・ムジカントゥス、そして (応用) 音楽学者」だとまで述べている (山口 2000: 11–15)。これは、誰もが音楽を活用することによって「教育一般の質を向上させ、平和・平等・繁栄の条件を満たした社会」(Blacking 1995: 242) づくりに参画できる、という山口の主張を言い表したものである。

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて

「山口修写真コレクション」のうち、現在までにデジタル化が完了している写真は、5,032 点に及ぶ。その内訳には 1964 年パラオ等での調査をはじめ、1970–1980 年代国際交流基金主催で行われた ATPA の事前調査、九学会連合の五島列島 (1964)・沖縄 (1971–1973)・奄美 (1975–1977) での調査、大阪大学創立 50 周年・南太平洋学術調査のパプアニューギニアでの調査 (1985) などが含まれている。写真の内容は、人物、風景、生活のみならず、モノとしての楽器、楽器を演奏・上演する様子、製作過程を写したものがあり、現地の人々にとっても資料的価値が高い写真が多くある。

次に、1970 年代沖縄・奄美における 569 点の写真から楽器の写真数点をとりあげ、それぞれの写真と照らし合わせながら、山口の楽器学の骨子をなす (1) エティック／イーミックスなアプローチ、(2) 楽器づくりのわざ、(3) 楽器の素材という観点から論じる。

5.2 山口修の楽器学と写真コレクションの意義

5.2.1 楽器へのエティック／イーミックスなアプローチ

既述のように、近代科学的な MHS 楽器分類法は、植民地等から収集されたエキゾチックな楽器を博物館で展示し、本国の人々に鑑賞してもらうための実用性から生まれた。これに対して、山口は「いまでも楽器学関係の必読文献の筆頭に挙げられるほどにその存在価値を失ってはいない」としつつも、「結局は矛盾に直面し、文化相対主義的な研究へと傾向が移行していった」と批判的な見方をしている (山口 2004: 75)。

山口は、客観的、論理的、普遍的な立場のことをエティック、文化相対主義に基づいた研究方法をイーミックスという対概念でしばしば論じている。これらは、言語学者 K. L. Pike (1912–2000) が米語の phonemics (音韻論) と phonetics (音声学) の語尾を独立させた造語である (山口 2000: 133)。そして、音楽におけるエティックなアプローチの例として、5 線記譜法や西洋の音楽用語で研究して諸文化を比較することや、機械を利用した分析をあげる。そのうえで、人間はどんなに努力しても客観的であることは不可能であるため、真にエティックな分析は理論的には不可能とってよい (山口 2000: 133–134) であるとか、「機械の組立てと操作にさえ文化的主観が入りうる」(山口 1983: 2481) のように、エティックな

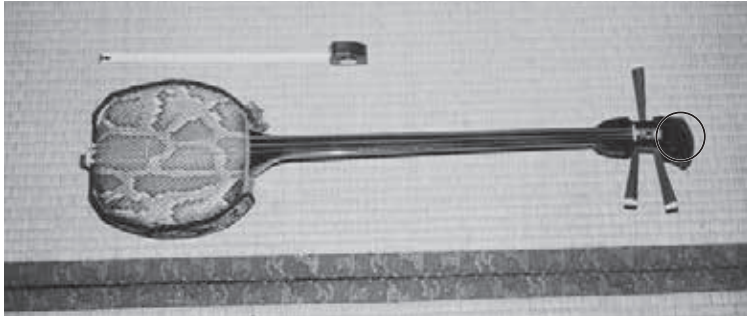


写真3 三線（1975–1977年頃 於：与論島？）DiPLAS ファイル名 05-07-16

分析には懐疑的である。

とはいえ、楽器を記述する際にはエティックな計測も必要である。ATPA 報告書では、楽器一点ずつの写真を撮るだけでなく、綿密に測定したサイズを記したスケッチを描いている。タイの音楽の音階を導き出す際、採譜を補足するためにセント値を求めている例もある (Koizumi, Tokumaru, and Yamaguchi eds. 1977)。写真3は、1975–1977年頃に与論島で撮影されたと思われる三線である。モノとして対象化し、巻き尺で計測している点で、エティックなアプローチを示す写真である。

5.2.2 楽器づくりのわざ

山口は、長い歴史の過程で積み上げてきた「わざ」および「わざ学」を応用音楽学の領域と見なす。そして、音楽におけるわざを生成過程と照らし合わせて、1. 楽の音を鳴り響かせるまでの段階で要求されるもの、2. 鳴り響かせる際のもの、3. 鳴り響いたあとのものの3段階に類別する。楽器づくりの複雑な工程は、第1段階になる。そして、「さまざまな音楽わざを観察し、実験し、何らかの目的に活用することが応用音楽学の下位領域で必要となる」と述べている (山口 2000: 169)。

写真は、楽器づくりのエティックな側面を伝えるのには向いているが、そこからイーミックスな側面を読み取るのは難しい (本特集 原田論文を参照)。そこで、データベースづくりの一環として、沖縄県三線製作事業協同組合の事務局長で自らも三線職人歴 25 年の仲嶺幹氏 (1976-) に依頼して、「山口修写真コレクション」の写真は何枚か確認してもらった (以下、仲嶺幹氏へのインタビュー、2020

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて
年4月10日)。

前述の写真3の三線については、仲嶺氏の師匠である仲嶺盛英氏製作の三線の型に類似するとの指摘があった。三線の型にも流行や個性があるが、チラあるいは天(写真3, 丸印)という部分のカーブに職人ごとの彫り方の特徴がみられるとのことであった。そもそも、三線は棹の部分に偏重され「棹で奏でることができる」とさえ言われてきた(沖縄県立博物館・美術館 2019: 52)。1952年、池宮喜輝はハワイ、北米、東京、大阪、沖縄本島の9,440挺余りの三線を悉皆的に調査して、その中から362挺を合格品として選定し『琉球三味線寶鑑』に纏めているが、その際も棹の工芸品の価値が評価された。南風原型、知念大工型、久場春殿型、久場の骨型、真壁型、平仲知念型、与那城型という三線の7つの型(池宮は、宇根親雲上型、翁長親雲上型を加えている)も、「南風原は天(面)が扁平で大きく、心[胴の内部に刺さっている部分]は荒造り」のように、棹の形状で特徴づけられる(池宮 1954: 23-41)。仲嶺氏のような熟練した職人は、棹の型の特徴に加えて職人ごとの個性を見抜くのである。

次に、写真4は奄美大島瀬戸内町蘇刈で同時期に撮影されたと思われる三線である。ここでも、カセットテープと共に写すことでサイズを示す意図が明らかである。エティックな立場からこの写真を見ると、製作途上のようにも見える。

ところが、仲嶺氏は黒く焼けている点に注目し、「胴の皮を張り替えないで長い間放置されていたのではないか」と判断した。しかも、胴が残っていることが貴重だとし、胴の継ぎ目が直角の側面に継いであることから、古い三線製法であ

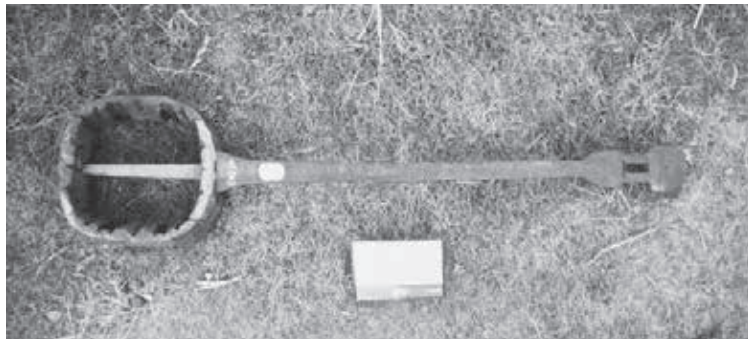


写真4 三線(1975-77年頃 於:奄美大島瀬戸内町蘇刈)
DiPLAS ファイル名 04_07_01

ると述べた。ちなみに、現代の三線では丈夫にするために、斜めに切った側面に継ぐことが主流となっている。園原らは、戦後「消耗品としての胴（チーガ）」の考えが助長されたと見なしている。胴に張る蛇皮は断裂するため消耗品になること、グルテン質の「スッキィ」で蛇皮を接着するため、胴木杵も虫食いにあいやすかったこと、蛇皮をはがし木杵の再利用することが三線職人には効率性に欠くことなどが理由である。そうした中で、1999年園原らは「盛嶋開鐘」という名器の胴に墨書銘を発見し、胴の歴史的価値を見出したのであった（園原・仲嶺・玉城 2019: 67-68）。

仲嶺氏は、写真4の三線の胴の内側に、現行の三線にはない彫り込みがあることにも関心を抱いた。というのも、「盛嶋開鐘」の胴の内側にも、複雑な凹凸の彫刻が施されていたからである。また、2000年には沖縄本島北部大宜味村源河出身者所蔵の三線の胴内の内側にも、中央部分に上下に山なりに凹を施した細工が発見され、民間人と思われる蒙氏糸数（糸数昌常）と王府役人であった渡慶次筑親雲上の2人の製作者の銘書きがあった（園原・仲嶺・玉城 2019: 69）。さらに、2018年に確認された「三線真壁型 胴銘 道乙酉渡慶次作」にも、細かい彫りが見られる。しかも、これは徳之島伊仙阿権村の間切長を代々担った^{たかし}尚家二代目直富主の頃、琉球の首里で現行の500万円相当で入手した1825年製の名工・渡慶次作の三線だとされることから、19世紀中頃までは徳之島にも琉球王府の三線文化が伝承されていたことを示す（園原・仲嶺・玉城 2019: 72-73）。そうであれば、奄美大島瀬戸内町蘇刈胴で撮影された写真4の胴にも、銘書きがあるかも知れない。

池宮による1952年の調査では、ハワイ、北米、東京、大阪、沖縄本島の三線が調査対象となった。1986年から琉球三線楽器保存・育成会が毎月沖縄県立博物館で行っている三線鑑定会も、宮古島や八重山諸島など県内離島では出張開催されているが、鹿児島県の離島は記録を見る限り、対象となっていないようである（沖縄県立博物館 2019: 60-61）。山口修写真コレクションが、埋もれている三線文化の掘り起こしのきっかけになることが期待される。

5.2.3 楽器の素材

山口は、人が生活し移動する過程で遭遇する自然環境、とりわけ動物・植物・鉱物にはたらきかけてつくりあげる道具や建造物の領域を物質文化と位置づけ、



写真5 八月踊りのチジン(クサビ締め太鼓)(1975 於:笠利町(現・奄美市))
DiPLAS ファイル名 07-10-04

音楽との関連でいえば「楽器がその典型」だと述べている(山口2000:166)。ここで注目したいのは、山口が楽器の材料を「人間が生活し移動する過程で遭遇」した動物・植物・鉱物だと見なしている点である。沖縄・奄美といった島嶼地域では、必ずしも材料が安定して供給されるとは限らない。逆に、その時に入手した材料を別の用途に使うこともある。

写真5は、チジンと現地で呼ばれるクサビ締め太鼓の例である。クサビ締め太鼓とは、枠のない締め太鼓で、締めひもの間にクサビを入れてひものを締めることで、皮を強く張るタイプの太鼓である。

小島美子(1929-)は、この種の太鼓は、奄美諸島北部で多く用いられているほか、奄美諸島最南端の与論島、日本最南端の沖縄県の波照間島等で使われており、かつては沖縄文化圏全体に広がったという。また、小島自身が日本にクサビ締め太鼓があるのを初めて知ったのは、1975年九学会連合の奄美総合調査の時だったと述べている(小島1993)。山口修写真コレクションには、小島を含む調査者の集合写真があることから、これがまさに小島が初めて目にしたクサビ締め太鼓だった可能性がある。

チジンには、通常、なめしていない馬や豚の皮が使われることが多い。ところが、写真6は大変珍しいことに、ヘビ皮のクサビ締め太鼓である。仲嶺氏は、こ



写真6 ヘビ皮のチジン(1975-77年頃 於:奄美大島瀬戸内町蘇刈)
DiPLAS ファイル名 04-07-15

の素材がダイヤモンドニシキヘビ *Morelia spilota* の皮であると指摘した。ダイヤモンドニシキヘビの皮は、目が粗くて破れやすいため、現在沖縄の三線には用いられていない。しかし、1973年にワシントン条約が締結されたことによって、主流の材料となっているアミメニシキヘビ *Python reticulatus* やビルマニシキヘビ *Python molurus bivittatus* の輸出入禁止が懸念された。これに伴い、大量に輸入されたダイヤモンドニシキヘビの皮がクサビ締め太鼓に活用されたのではないかということである。なお、ワシントン条約で輸出入禁止の対象となったインドニシキヘビ *Python molurus molurus* は、三線には用いられていない(仲嶺幹氏へのインタビュー, 2020年4月10日)。

5.3 知的プラットフォームとしての DiPLAS のデータベース

ATPA の共同企画監修以来、山口は Tokumaru (1977) の提唱に賛同して、目的論的なフィードバックではなく、多大な労力と時間を費やしてフィールドバックを実践してきた。しかし、研究成果をフィールドに還元するだけで十分だったのか、問い直すことも必要である。ATPA の例であれば、プロジェクトの終了によって関係者も四散し、報告書や映像のみがその内容を知る手がかりとなっている。それらは、現地の人々にとって貴重な過去の遺産となることは間違いないが、実際これらの資料にアクセスできる当該文化の担い手は、どれだけいるのだろうか。従来のフィールドバックには、こうした限界があった。

それに対して、DiPLAS から提供されるデータベースは、単に電子化した写真に研究者によるエティックな記述を付随させてインターネット上にあげ、コンピュータからアクセスして並べ替え、検索できるだけのものに留まらない。関係者との「対話の積み重ね」(フェルド 1988: 310-339)を続け、そこから得られる民俗分類学 folk taxonomy (山口 1983: 2481) に則った用語や説明、「間主観性」を反映したイーミックスな情報を付すなどによって、文化の壁や歴史的時間を越えた相互理解のツールとなる(本特集 序論を参照)。

のみならず、DiPLAS は研究者、文化の担い手など関係者にとっての知識創造のプラットフォームとなる。経営学者の野中郁次郎と竹内広高は、「ある特定の状況や文脈において、他者や環境との相互作用を通じ、人々によって創造され、実践される、正当化された真なる信念」である「知識」が、①共同化、②表出化、③連結化、④内面化のプロセスによって、時間をかけて社会的に創造と実践を繰り返す SECI 動態モデルを提示している。その際、M. ポランニーによる暗黙知と形式知の区分を援用し、両者の知識間で生じる認識論的な次元と、知識を創造する人と他者との間で生じる存在論的な次元を念頭に置いている(野中・竹中 2020: 105-144)。

SECI 動態モデルを DiPLAS におけるデータベース構築にあてはめると、次のようになる。まず①のプロセスでは、研究者と文化の担い手などが開かれた関係の中で、写真資料を介して暗黙知(あるいはイーミックスな見方)を共有し、各自が環境についての暗黙知を獲得する。そして、知的、身体的、感情的に相互理解を深め合う。②では、共同化で積み重ねられた暗黙知を弁証法的に統合し、暗黙知のエッセンスを概念化する。そして、言葉やイメージやモデルを用いた修辞、メタファーで形式知(あるいはエティックな見方)に変換する。③では、DiPLAS 写真資料の内外から形式知が集積、結合、整理、計算されることで、それ自体が複合的で体系的な形式知となる。この段階を経て、情報公開が可能となる。④では、研究者と文化の担い手などがそれぞれの文脈において、形式知によって行動を起こし、実用的暗黙知を身につける。SECI プロセスは、水平方向にその過程をたどると並行して、存在論的な次元を垂直方向に上っていく。これにより、時空間を超えた持続的なデータベースづくりが構築され、DiPLAS 写真資料が生き生きとした人類の文化遺産となるのである。

6 結び

知的プラットフォームとしての DiPLAS のデータベースにおいて、山口修写真コレクションの文化遺産としての可能性を開花させる役割を担うのは、研究者、文化の担い手などのステークホルダーである。山口修写真コレクションのデータベースづくりにあたっては、ハワイとフィリピンについては R. D. Trimillos、ベトナムについては Tran Quang Hai、パプアニューギニアについては Don Niles、インドネシアについては中川真の各研究者から協力を得られている。また幸い、山口が著している 2 冊の放送大学ラジオ番組教材の「フィールドノート」や「随想」には、「山口修写真コレクション」関連情報が随所織り込まれている（山口 2000; 2004）。

たとえば、「山口修写真コレクション」には薩摩琵琶奏者・鶴田錦史（1911–1995）による琵琶奏法のコマ撮り写真が 114 点ある（写真 7a・7b）。鶴田は、1967 年 11 月 9 日、尺八の横山勝也（1934–2010）と共に小澤征爾指揮のニューヨーク・フィルと《ノーベンバー・ステップス》を初演した奏者であった。鶴田と山口の関係は、「フィールドノート 3–2」の一部に記されている（山口 2000: 43–44）。



写真 7a 薩摩琵琶奏法①
（1975 於：東京）
DiPLAS 番号 06_04_18



写真 7b 薩摩琵琶奏法②
（1975 於：東京）
DiPLAS 番号 06_06_10

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて

「山口修写真コレクション」におけるミクロネシアの写真の同定は、当該地域をフィールドとする筆者の今後の課題である。山口は、「フィールドノート9 (ヤップ)」において、筆者が40年前にこれと同じような作業を行ったことを記している。すなわち、「ヤップの音楽で卒論を書きたいと(筆者が)言ったとき、私(山口)のかなえられなかった夢がこれで実現すると直感して、私の持っていたすべての資料を提供した。ヤップに単身乗り込み(山口が1965年に歌を採集した)テセンとも会って、私には不可能だった女性からの情報収集も果たした」と記されている(山口2000:115-116)。2011年、国立台湾師範大学の銭善華教授の招聘により、筆者は思いがけなく山口と共にヤップを訪問したが、その時には1965年に山口と接触した人物はすべて故人となっていた。さらに、筆者は2013年テセンの親族に面会して、山口が当時オープンリールテープに収録した歌をデジタル化する許可をもらった。その時、テセンの親族は「その歌の意味もわからない」と述べていた。そして、ようやく2020年度、筆者は沖縄県立芸術大学から研究支援資金を得て、そのデジタル化を行うことになった。

山口の直観が正しかったのかどうかはわからないが、筆者は山口の紹介でB. B. Smithから調査研究のアドバイスを受けることが出来たし、その後もミクロネシアでの調査を継続している。また、2020年6月10日のB. B. Smith 100歳祝賀イベントにも、沖縄からリモートで参加することが出来た。「山口修写真コレクション」を単なる写真集に留まらず、知識として創造いくこと、そのための共同化、表出化、連結化、内面化を実践していくことが筆者にとっての課題である。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 JP16H06281, JP70332690 の助成を受けたものです。山口修写真コレクションを後進の研究のためにお譲りいただいた山口修・大阪大学名誉教授には心より感謝します。また、インタビューにご協力いただいた沖縄県三線製作事業協同組合事務局長・仲嶺幹氏、情報提供等ご協力をいただいた山口正晃氏、馬場理恵子氏、2017年6月から2019年3月まで4山口修蔵書等プロジェクトとして共に作業した仲万美子氏、荒川恵子氏、薛羅軍氏をはじめ、同プロジェクトにご協力いただいた福岡正太氏、寺田吉孝氏、そして大阪大学文学部美学科音楽学研究室の学友に感謝します。

注

- 1) 同報告書の編集方針では、日本語のローマ字表記において政府が認可するヘボン式と日本の論理に即したシステム (logical Nippon system) の訓令式が併用されていることが問題視されている (Tokumaru and Yamaguti 1986: x-xi)。その意にそぐわず、本稿では出版年等によって山口のローマ字表記が異なることをお断りしておく。
- 2) 民族音楽学では、非西洋音楽をさして「民族音楽」と呼ぶのは差別的だとし、西洋音楽を含めての「世界音楽」の使用 (柘植 1991) や「民族音楽というレッテルを使用しない」(山口 2000; 徳丸 2002: 22) という主張がある。本稿では、原則として「民族音楽」の代わりに「諸民族の音楽」という文部科学省「学習指導要領」の表現を暫定的に用いる。
- 3) この考え方は、A. Seeger (1945-) が「音楽は歴史をつくるだけではなく、未来もつくる」(A. Seeger 1991: 34) として提唱した「歴史的民族音楽学」の考え方にも通じる。
- 4) R. Lachmann (ラッハマン 1960) や C. Sachs (ザックス 1966) 等、ドイツ比較音楽学者による研究書は、岸辺が 1960 年代に翻訳して紹介した。
- 5) 『田邊先生還暦記念東洋音楽論叢』(岸辺編 1943) の寄稿論文 34 本を例にあげると、序文執筆者は音響学者・田中正平 (1862-1945)、各論文の研究対象地域は日本国内 23、中国 4、朝鮮 3、琉球 2、インド 1、台湾 1 である。吉川はこの論文集を「東洋音楽における音響学的、音楽美学的、音楽理論的、音楽史的等の諸問題に及んでいる」と評価しているが (吉川 1951)、諸民族の音楽については比較分析 3 本、実地調査は 1943 年黒沢隆朝による台湾の「高砂族の口琴」1 件のみである。
- 6) 田辺尚雄の姓は、原則として以下では新字体に統一する。田辺の 1922-1923 年、1934 年の現地録音は、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』に収録されている (田辺監修 1978)。
- 7) 榊の研究内容も、近年明らかになってきている (劉他 2014)。
- 8) 黒沢 (1895-1987) は、1943 年榊源次郎 (1904-1995) とレコード技師を同伴して、台湾で 3 か月の調査を行った。そして、台湾原住民および漢民族の音楽からなる 26 枚の SP レコード『台湾民族音楽』と 10 巻のドキュメンタリー映画『台湾の芸能』を制作した (王 2008: 90-91)。黒沢が 1943 年の調査によって制作した 26 枚の SP レコード『台湾民族音楽』の編集・校訂版 CD ブックレット (王・劉 2008) 出版に際しては、当時台湾の南華大学客員教授を務めていた山口が、中国語、日本語、英語の 3 か国語の翻訳作業に加わっている (王 2008: 95) また、黒沢は楽器学でも功績があり (黒沢 1972; 福岡 1998: 156)、近年も著作が編集・校訂版として出版されている (黒沢 1996)。
- 9) 山口は、ペラウ Belau というパラオ Palau の現地名称の使用を率先している。ただ、戦前はパラオとして知られていたこと、独立後もパラオ共和国 Republic of Palau が使用されていることから、以下ではパラオと表記する。
- 10) 岸辺は、1960 年代になると円山洋子 (渡航年: 1961-1962, インド)、藤井知昭 (渡航年: 1964, アフガニスタン)、大谷紀美子 (渡航年: 1967-1969, インド)、柘植元一 (渡航年: 1963-1965, イラン)、山口修 (渡航年: 1964-1967, ハワイ) が音楽研究のために留学し、三谷陽子 (韓国、台湾)、梶川信子 (台湾)、石原笙子 (台湾) も海外で調査旅行を行ったことをあげている (岸辺 1970: 22)。大谷は、その後ハワイ大学やクイーンズ大学ベルファストにも留学した。
- 11) ICTM には、各地域や国を結ぶワールド・ネットワークの仕組みがある。日本では、東洋音楽学会が ICTM 国内委員会の役割を果たしている。 <https://ictmusic.org/general-information>
- 12) C. シーガーは、1934 年アメリカ比較音楽学会を設立し 1945 年、1946 年と同会長を務めたが、同学会が解散してからはアメリカ音楽学会を拠点に研究活動をしていた (Seeger 1951)。
- 13) 1961 年テヘランで開催された IFMC 参加以来、「アジアにおける伝統音楽と西洋音楽との関係、あるいは音楽の近代化の問題」が、小泉の研究テーマの 1 つとなった (岡田 1995: 200-204)。その後、1963 年米国占領下にあった沖縄調査、1964 年第 1 回カイロ国際民俗芸能祭参加に続けてのナイル河上流の民俗音楽調査、1967-1968 年カナダとアラスカのエスキモー (イヌイット) 調査、1972 年インドネシア等、30 数カ国におよぶ国や地域で比較的短期間のフィールドワークを行った。また、エスキモー調査では、ウェスリヤン大学に在籍していた柘植を呼び寄せた (岡田 1995: 210-255)。
- 14) LP レコードは多数出版されているが、それらを採録した CD 音源としては『ワールド・ミュージック・ライブラリー』(50 枚、キングレコード、1991 年)、『世界民族音楽集大成』

- (100枚, キングレコード, 1992年)がある。
- 15) 国際交流基金は1972年設立の外務省外郭団体で, 日本の芸能, 芸術の海外への紹介を行っていたが, 1974年犬丸直理事がアジアの芸能を日本で紹介し, 日本人がアジアの芸能, 文化を理解する機会として, 伝統芸能の分野での国際交流の可能性について小泉に相談し, 相互理解に役立つ学問的な成果を残す方向に定まった(岡田1995:278-280)。
 - 16) ATPAの各実行(上演)プログラムのテーマは, 第1回「日本音楽の源流を訪ねて」(1976年), 第2回「アジアのうた」(1978年), 第3回「神々の跳梁」(1981年), 第4回「旅芸人の世界」(1984年), 第5回「アジアの神・舞・歌—愛と祈りの芸能」(1987年)であった。詳細については, 小川(2016)を参照のこと。
 - 17) 徳丸によると, この計画には日本がアジアのデータを集め, アジアの芸術を取奪すると考えたアメリカの民族音楽学者の批判を受けた。
 - 18) 1975年にレーゲンスブルクで開催されたIFMCでJ. Blacking(1928-1990)本人から原典を入手した(徳丸2002:28-29)という徳丸による翻訳書『人間の音楽性』(ブラッキング1978)に続いて, 『民族音楽学リーディングス』(秋山編1980), 『音楽人類学』(メリアム1980)の各翻訳書が出版された。
 - 19) 同時期に出版された民族音楽学入門書には, 放送大学ラジオ番組教材『民族音楽学』(徳丸1991), 『民族音楽学理論』(徳丸1996), 『世界音楽への招待 民族音楽学入門』(柘植1991), 『はじめての世界音楽』(柘植・塚田編1999), 水野信男(1937-)による『民族音楽学の課題と方法』(水野編2002)がある。
 - 20) 新規撮影映像のみならず, ATPA, NHK「アジア民族芸能祭」等, 既存の公演記録等を加えた計30時間・500曲に及ぶ大系で, VHSまたはβ30巻, VHD16枚のうちから選択購入してきた。
 - 21) 欧州やアフリカの研究者の協力を得たレーザーディスク15枚からなる大系。
 - 22) 藤井監修の音響映像資料は(藤井監修1992, 1995)など, 他にも多数ある。
 - 23) この論文では“applied” ethnomusicology が用いられているが, 同様の意味で“applied”の代わりに“public sector 公共部門”, “engaged 専門職の”, “active 活動的な”, “practical 実践的な”を用いることもある。
 - 24) C.シーガーは, 1930年代末に「音の公共政策を科学的に打ち立て管理するための基本的調査の分野」としての「応用音楽学」という語を使っていた(C. Seeger 1939)。

参照文献

〈日本語〉

秋山龍英編

1980 『民族音楽学リーディングス』東京:音楽之友社。

アメリカンセンター・ジャパン

n.d. 国務省出版物「米国の歴史の概要—変動の時代:1960~1980年」

<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/3492/> (2020年8月26日最終閲覧)

池宮喜輝

1954 『琉球三味線寶鑑』沖縄県立図書館蔵。

エリス, A. J.

1951 『諸民族の音階—比較音楽論』門馬直美訳, 東京:音楽之友社 [Ellis 1885]。

遠藤徹

2017 「東洋音楽学会の成立とその前提」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』69: 236-222。

王櫻芬

2008 「編者による序文の1」劉麟玉訳『戦時臺灣的聲音1943—黒澤隆朝《高砂族の音楽》復刻—暨漢人音楽』pp. 90-96, 台北:國立臺灣大學。

王櫻芬・劉麟玉

2008 『戦時臺灣的聲音1943—黒澤隆朝《高砂族の音楽》復刻—暨漢人音楽』黒澤隆朝監

修・解説, 山口修他訳, 台北: 國立臺灣大學。

- 太田太郎
 1938a 「歐米音楽行脚の覺書から(上)」『東洋音楽研究』1(3): 41-47。
 1938b 「歐米音楽行脚の覺書から(下)」『東洋音楽研究』1(4): 61-69。
 1943 「マイヨン四絃楽器分類法の源流として観たる印度の楽器分類法」岸辺成雄編『田邊先生還曆紀念東亞音楽論叢』pp. 139-156, 東京: 山一書房。
- 岡田真紀
 1995 『世界を聴いた男——小泉文夫と民族音楽』東京: 平凡社。
- 小川恵祐
 2016 「アジア伝統芸能の交流(ATPA)プロジェクトの研究——その日本での劇場公演制作に関わった人々の役割の互換, 創造性, 挑戦に注目して」沖縄県立芸術大学音楽芸術研究科修士論文。
- 沖縄県立博物館・美術館編
 2019 『沖縄が誇る家宝の三線展』那覇: 琉球三線楽器保存・育成会。
- 蒲生郷昭・柴田南雄・徳丸吉彦・平野健次・山口修・横道萬里雄編
 1988 『岩波講座日本の音楽・アジアの音楽』(全7巻, 別巻2巻各CD付) 東京: 岩波書店。
- 岸辺成雄
 1970 「わが国の東洋音楽実地調査の開拓者」『中国・朝鮮音楽調査紀行』(東洋音楽選書11) pp. 15-25, 東京: 音楽之友社。
- 岸辺成雄編
 1943 『田邊先生還曆紀念東亞音楽論叢』東京: 山一書房。
 1953 「比較音楽学の発達」『音楽と社会』(創元音楽講座 第4巻) pp. 58-62, 東京: 創元社。
- 黒沢隆朝
 1972 『図解世界楽器大事典』東京: 雄山閣出版。
 1996 『黒沢隆朝 東南アジア音楽紀行』梅田英春編, 東京: 大空社。
- 講談社
 1993-1995 『ニューグローヴ世界音楽大事典』(全22巻, 別冊2冊) 東京: 講談社。
- 小島美子
 1993 「クサビ締め太鼓の分布と民俗文化の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』52: 267-287。
- 小日向英俊
 2014 「世界音楽——日本における受容とその意味」『伝統と創造——東京音楽大学民族音楽研究所研究紀要』4: 15-28。
- ザックス, C.
 1966 『比較音楽学』岸辺成雄・野村良雄訳, 東京: 全音楽譜出版社。
- 杉本舞
 2008 「ウィーナーの『サイバネティクス』構想の変遷——1942年から1945年の状況」『科学哲学科学史研究』2: 17-28。
- 園原謙・仲嶺幹・玉城あゆみ
 2019 「銘書き三線棹・附胴とその三線製作者の系譜」『沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要』12: 65-91。
- 田辺秀雄監修
 1978 『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(LP, TW-80011) 東京: 東芝レコード。
- 月溪恒子・山口修編
 2006 『音をかたちへ——ベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』中島貞夫監修, 京都: 醍醐書房。
- 柘植元一
 1991 『世界音楽への招待——民族音楽学入門』東京: 音楽之友社。
- 柘植元一・塚田健一編
 1999 『はじめての世界音楽』東京: 音楽之友社。
- 東洋音楽学会編
 1968 『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』(東洋音楽選書5) 東京: 音楽之友社。

小西 応用音楽学的実践としての山口修 アジア・太平洋音楽学写真コレクションのデータベース化に向けて

徳丸吉彦

- 1991 『民族音楽学』東京：日本放送出版協会。
- 1996 『民族音楽学理論』東京：日本放送出版協会。
- 2002 「民族音楽学再構築と自分の歴史」水野信男編『民族音楽学の課題と方法——音楽研究の未来をさぐる』pp. 21–38, 京都：世界思想社。
- 2018 「音楽学と伝承現場の関係」社会技術レポート No.60 科学技術と知の精神文化 講演録 46-2 国立研究開発法人科学技術振興機構。https://www.jst.go.jp/ristex/output/files/60_tokumaru2018.4.pdf (2021年4月3日最終確認)

野中郁次郎・竹内弘高

- 2020 『ワイズカンパニー——知識創造から知識実践への新しいモデル』黒輪篤嗣訳, 東京：東洋経済新聞社。

福岡正太

- 1998 「書評 黒沢隆朝著・梅田英春編『東南アジア音楽紀行』東京：大空社 1996」『東洋音楽研究』63: 155–159。

フェルド, S.

- 1988 『鳥になった少年——カリ社会における音・神話・象徴』山口修・山田陽一・ト田隆嗣・藤田隆則訳, 東京：平凡社 [1982 *Sound and Sentiment: Birds, Weeping, Politics, and Song in Kaluli Expression*, Philadelphia: The University of Pennsylvania Press]。

藤井知昭監修

- 1988 『音と映像による世界民族音楽大系』(VHS またはβ30 巻あるいはVHD16 枚) 日本ビクター企画制作, 国立民族学博物館協力, 東京：日本ビクター。
- 1992 『地球の音楽——フィールドワーカーによる音の民族誌』(CD ブックレット 75 冊) 東京：日本ビクター。
- 1994 『新・音と映像による世界民族音楽大系』(LD15 枚) 東京：日本ビクター。
- 1995 『天地楽舞——音と映像による中国五十五少数民族民間伝統芸能大系』(VHS18 巻) 東京：日本ビクター株式会社, 北京：中国民族音像出版社。

藤井知昭・水野信男・山口修・桜井哲男・塚田健一編

- 1992 『民族音楽概論』東京：東京書籍。

ブラッキング, J.

- 1978 『人間の音楽性』徳丸吉彦訳, 東京：岩波書店 [J. Blacking, 1973 *How Musical is Man? Jessie & John Danz Lectures*. Belfast: The Queen's University]。

平凡社

- 1956 『音楽事典』東京：平凡社。
- 1983 『音楽大事典』全6巻, 東京：平凡社。

堀内敬三

- 1933 『音楽講座——世界民族音楽』東京：学藝社。

水野信男編

- 2002 『民族音楽学の課題と方法』京都：世界思想社。

メリアム, A. P.

- 1980 『音楽人類学』藤井知昭・鈴木道子訳, 東京：音楽之友社 [1964 *The anthropology of Music*, Evanston: Northwestern University Press]。

山口修

- 1983 「民族音楽学」『音楽大事典 5』pp. 2471–2482, 東京：平凡社。
- 1985 「ミクロネシア・ベラウ歌謡歌詞集成——1965～1966年の民俗音楽学的フィールドワークの記録」『大阪大学文学部紀要』25: 87–306。
- 1990 「水の淀みから——ベラウ文化の音楽学的研究」大阪大学学位請求論文。
- 1999 『出自積淤的水中——以貝労音楽文化為实例の音楽学新論』羅傳開監修, 紀太平・朱家駿・仲万美子・橘田勲訳, 北京：中国社会科学出版社。
- 2000 『応用音楽学』東京：放送大学教育振興会。
- 2002 「多くの若い研究者を育んだATPA」アルク出版企画編『小泉文夫の遺産——民俗音楽の礎』p. 28, 東京：キングレコード。
- 2004 『応用音楽学と民族音楽学』東京：放送大学教育振興会。

- 山田陽一
 2002 「小泉文夫と民族音楽学」アルク出版企画編『小泉文夫の遺産—民俗音楽の礎』pp. 38–39, 東京：キングレコード。
- 吉川英士
 1951 「紹介と批評『田邊先生還暦記念東亞音楽論叢』」『東洋音楽研究』9: 163–164。
- ラッハマン, R.
 1960 『東洋の音楽 比較音楽的研究』岸辺成雄訳, 東京：音楽之友社。
- 劉麟玉他
 2014 『梶源次郎の民族音楽研究活動の再評価—インド及び台湾民族音楽研究の視点を手掛かりに』(2011 年度–2013 年度科学研究費(基盤研究(C))研究成果報告書)。

〈外国語〉

- Adler, G.
 1885 Umfang, Methode und Ziel der Musikwissenschaft. *Vierteljahrsschrift für Musikwissenschaft* 1: 5–20.
- Blacking, J.
 1995 *Music, Culture, and Experience: Selected Papers of John Blacking*. Edited and with an introduction by Reginald Byron. With a forward by Bruno Nettl. Chicago, IL and London: The University of Chicago Press.
- de Coppet, D. and H. Zemp
 1978 *'Aré' aré: une peuple mélanésien et sa musique*. Paris: Seuil.
- Densmore, F.
 1918 *Teton Sioux Music* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 61), Washington D. C.: American Ethnology.
- Duckles, V. and J. Pasler
 2001 The Nature of Musicology. In S. Sadie (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed., Vol. 17), pp. 488–492. London: Macmillan.
- Edwards, J. R.
 2019 Public Sector Ethnomusicology. In J. Sturman (ed.) *The SAGE International Encyclopedia of Music and Culture: 1758–1759*. Thousand Oaks: SAGE Publications, Inc.
- Ellis, A. J.
 1885 On the Musical Scales of Various Nations. *Journal of the Society of Arts* 33: 485–517.
- Herzog, G.
 1935 Plains Ghost Dance and Great Basin Music. *American Anthropologist* 37: 403–419.
- Hornbostel, M. von E. and C. Sachs
 1961 Classification of Musical Instruments: Translated from the Original German by A. Baines and K. P. Wachsmann. *The Galpin Society Journal* 14: 3–29.
- Karpeles, M.
 1965 The International Folk Music Council. *Journal of the Folklore Institute* 2–3: 308–313.
- Koizumi, F., Y. Tokumaru, and O. Yamaguchi (eds.)
 1977 *Asian Musics in an Asian Perspective: Report of Asian Traditional Performing Arts (ATPA) 1976*. Tokyo: Heibonsha. Reprinted in 1983, Tokyo: Acadenia Music.
- Kunst, J.
 1950 *Musicologica: A Study of the Nature of Ethno-Musicology: Its Problems, Methods, and Representative Personalities*, Amsterdam: Indisch Institut.
 1959 *Ethnomusicology: A Study of Its Nature, Its Problems, Methods and Representative Personalities to Which Is Added to a Bibliography*, The Hague: Martinus Nijhoff.
- Libin, L. and A. Myers
 2001 Since 1800. Instruments, Collections of. In S. Sadie (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed., Vol. 12), pp. 431–432. London: Macmillan.
- McAllester, D.
 1954 Enemy Way Music: A Study of Social and Esthetic Values as Seen in Navaho Music. *Papers of*

- the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University* 41(3).
- Mahillon, V-C.
1880 *Catalogue descriptif et analytique du Musée Instrumental du Conservatoire Royal de Musique de Bruxelles*. Bruxelles: Musée Instrumental du Conservatoire Royal de Musique de Bruxelles.
- Merriam, A. P.
1955 The Use of Music in the Study of a Problem of Acculturation. *American Anthropologist* 57: 28–34.
- Nettl, B.
1955 Musical Culture of the Arapaho. *Musical Quarterly* 1: 1–16.
- Pettan, S. and J. T. Titon (eds.)
2015 *The Oxford Handbook of Applied Ethnomusicology*. New York: Oxford University Press.
- Rhodes, W.
1952 Acculturation in North American Indian Music. In S. Tax (ed.) *Proceedings and Selected Papers 29th International Congress of Americanists, Acculturation in the Americas*, pp. 127–132. Chicago: University of Chicago Press.
1956 Toward a Definition of Ethnomusicology. *American Anthropologist* 58: 457–463.
- Rosenbleuth, A., N. Wiener, and J. Bigelow
1943 Behavior, Purpose and Teleology. *Philosophy of Science* 10 (1): 18–24.
- Seeger, A.
1991 When Music Makes History. In S. Blum, P. V. Bohlman, and D. D. Newman (eds.) *Ethnomusicology and Modern Music History*. Urbana: University of Illinois Press.
- Seeger, C.
1939 Music and Government: Field for an Applied Musicology. *Papers Read by Members of the American Musicological Society at the Annual Meeting, Sept. 11 to 16*, pp. 11–20. Oakland: University of California Press.
1951 Systematic Musicology: Viewpoints, Orientation and Methods. *Journal of the American Musicological Society* 4 (3): 240–248.
- Sheehy, D.
1992 A Few Notions about Philosophy and Strategy in Applied Ethnomusicology. *Ethnomusicology* 36 (3): 323–336.
- Small, C.
1998 *Musicking: the Meaning of Performance and Listening*. Hanover, NH: University Press of New England, London: Wesleyan University Press.
- Tatar, E. (ed.)
1985 *Call of the Morning Bird*. Honolulu: Anthropology Department, Bernice Pauahi Bishop Museum.
- The Society for Ethnomusicology
2016 1986 Lecture: Barbara B. Smith.
https://www.ethnomusicology.org/page/HS_Smith (2021年1月7日最終確認)
- Titon, J. T.
1992 Music, the Public Interest, and the Practice of Ethnomusicology. *Ethnomusicology* 36 (3): 315–322.
2015 Applied Ethnomusicology: A Descriptive and Historical Account. In S. Pettan and J. T. Titon (eds.) *The Oxford Handbook of Applied Ethnomusicology*, pp. 4–29. New York: Oxford University Press.
- Tokumaru, Y.
1977 On the Method of Comparison in Musicology. In F. Koizumi, Y. Tokumaru, and O. Yamaguchi (eds.) *Musics, Signs and Intertextuality: Collected Papers*, pp. 5–11. Tokyo: Academia Music.
- Tokumaru, Y. and O. Yamaguti
1986 *The Oral and the Literature in Music*. Tokyo: Academia Music.
2002 *Placing Traditions in Future Global Societies: Symposium of Preservation and Promotion of Asian Traditional Performing Arts*. Tokyo: Japan Foundation.

- Tokumaru, Y., M. Ohmiya, M. Kanazawa, O. Yamaguti, T. Tukitani, A. Takamatsu, and M. Shimosako (eds.)
1991 *The Tradition and Its Future in Music*. Tokyo: Mita Press.
- Waterhouse, W.
2001 Mahillon, Victor-Charles. In S. Saide (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed., Vol. 15), p. 601. London: Macmillan.
- Yamaguchi, O.
1967 The music of Palau: An Ethnomusicological Study of the Classical Tradition. M. A. Thesis, University of Hawai'i at Manoa.
1977 Toward a Better Documentation of Music Making. In F. Koizumi, Y. Tokumaru, and O. Yamaguchi (eds.) *Asian Musics in an Asian Perspective: Report of Asian Traditional Performing Arts (ATPA) 1976*, pp. 12–20. Tokyo: Heibonsha.
- Zemp, H.
1971 Instruments de musique de Malaita (I). *Journal de la Société des Océanistes* 30: 31–53.
1972 Instruments de musique de Malaita (II). *Journal de la Société des Océanistes* 34: 7–48.
1978 'Aré' aré Classification of Musical Types and Instruments. *Ethnomusicology* 22 (1): 37–67.
1979 Aspects of 'Aré' aré Musical Theory. *Ethnomusicology* 23 (1): 5–48.